川崎病におけるγ－グロブリンの大量点滴療法
多施設による control study

（共同研究者）	（所 属 機 関）
古庄　巻史	小倉記念病院小児科
神谷　哲郎	国立循環器病センター小児科
中野　博行	静岡県立こども病院循環器科
清沢　伸幸	京都府立医科大学小児科
四宮　敬介	京都大学医学部小児科
林寺　　忠	国立京都病院小児科
広瀬　　修	大阪府立母子保健総合医療センター
真鍋　　穣	耳原総合病院小児科
瓦野　昌治	和歌山赤十字病院小児科
横山　達郎	近畿大学医学部心臓小児科
田村　時緒	天理よろづ相談所病院小児循環器科
森　　忠三	島根医科大学小児科
馬場　国蔵	神戸市立中央市民病院小児科
馬場　　清	倉敷中央病院小児科

（目的）：われわれは先にγ－グロブリンの大量点滴療法が川崎病において抗炎症効果を示し、かつ冠動脈病変の発生を著明に減少させることを報告した。今回、本療法の有用性を確認するために、従来の川崎病の治療法であるアスピリン療法との比較検討を多施設による controlled study によって行った。

（方法）：昭和58年4月から10月末現在までに東海以西の計14施設に川崎病を発症して入院した計51例の患児を対象とした。コントローラーにより、患児の治療は従来のアスピリン療法（アスピリン10～30mg／Kg／day）単独で行うもの（A群）とアスピリン療法＋γ－グロブリンの大量点滴療法（S－スルフォ化－γ－グロブリン400mg／Kg／day を5日間点滴静注）（B群）の2群に無作為に割りつけられ、川崎病発症7日以内に治療を開始した。臨床症状、検査項目は経時的に検索し比較検討した。小児循環器を専門とする医師による心断層エコー検査は入院来、最初の2週間は原則として毎日、以後も週2回以上の検査を行った。さらに、原則として50病日までに選択的冠動脈撮影を施行し、冠動脈病変の有無を検索した。

（結果）：51例の患児中2例は off study となり、A群20例、B群29例を対象とした。年齢、性、治療開始日、最高白血球数、最高赤沈値、最高CRP値、最高血小板数などは両群間に有意差はなかった。治療開始より解熱までの日数はA群：7.0±4.9日、B群3.4±3.1日（$P<0.01$）、CRP陰性化までの日数はA群：23.5±8.3日、B群：13.1±5.9日（$P<0.001$）といずれもB群で有意に短縮した。心エコー図で経過中冠動脈拡大のみられたものはA群：20例中10例（50％）、B群：29例中4例（14％）、冠動脈撮影にて冠動脈病変の認められたものはA群：20例中7例（35％）、B群：29例中1例（3.4％）であった（いずれも$P<0.02$）。

（結論）：本研究は現在まだ進行中であるが、γ－グロブリン大量点滴療法は川崎症において抗炎症効果を示し、冠動脈病変の発生を著しく抑制する有用な治療法であると考えられる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

(目的):われわれは先にγ-グロブリンの大量点滴療法が川崎病において抗炎症効果を示し、かつ冠動脈病変の発生を著明に減少させることを報告した。今回、本療法の有用性を確認するために、従来の川崎病の治療法であるアスピリン療法との比較検討を多施設による controlled study によって行った。